宮地嘉六著

職工物語

中央勞働學園版

昭和二十四年十一月二十五日　印刷
昭和二十四年十一月三十日　發行

定價　一一〇圓

職工物語

著者　宮地嘉六

東京都港區芝公園六號地
財團法人　中央勞働學園內

發行者　飯田北里

東京都港區芝南佐久間町一ノ七

印刷者　研文社　中川二郎

發行所　東京都（芝局區內）港區芝公園六號地
財團法人　中央勞働學園
電話芝二七五、一一三一—六
振替東京　一九五四五九

出協會員番號B二〇三〇〇八

職工物語

序

わが國におけるプロレタリア文藝運動は、大正十年十月の「種子蒔く人」にはじまつているが、それ以前にも、おそらくはいく程かの種子はこぼれ落ち、飛散してそこゝに發芽はしたろうが、季節に先きだつたこれらの種子は、プロレタリア文藝の運動には成長しなかつた。そしてこういう種子の一つが宮地嘉六だつたかもしれない。勞働生活の體驗のなかから生まれた宮地君の作品は、當時、異色のあるものとされたのであつた。

まもなく宮地君は、文壇からは姿を消した。宮地君のその後については、私は少しも知らなかつた。終戰後、滿洲から歸つた宮地君の姿が、幾年ぶりかで忽然、私の視野のうちに現われた。この間の長い、そして變化に富んだ生活の體驗は、もし宮地君を文藝

家としては大成しなかつたとしても、人としての宮地君を大成したことを疑わない。私は遺憾ながらまた本書を讀んではいないが、宮地君の勞働生活の體驗から生まれた本書から、讀者はいろいろの意味で有益な示唆をうけるだろうことを、私は希望しかつ期待するものである。

一九四九年十一月十日

山　川　　均

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

素朴な勤労者の手記をよろこぶ

宮地さんの處女作が世間の注意をひいたのはもう三十年も前のこと、第一次大戰後のデモクラシーの滿潮期でした。まだプロレタリア文學などという名もなかつた頃でしたが、その最初の萠芽ともいつてよい內容と使命とをおびて、靜かに、謙抑に、しかし確乎たる意識をもつてあらわれた特殊の作品の印象を、私は今なお忘れることができません。それは後年の、いわゆるプロレタリア作家のある人々の中に見られるようなひとりよがりのはでな英雄主義、高慢な排他主義などは藥にしたくも見られない、極めて素朴な、じみな、正眞正銘の勤労者の生活記錄であつたと覺えています。

あれから三十年、宮地さんは無一物の引揚者として苦勞にやつれたいたましい姿で滿洲から歸つておいでした。男手一つで育てあげた二人のお子は幸い元氣でもう獨立しておいでなのが何よりですが、久しく緣のきれていた內地の、しかも戰後のすさんだ社

會に浦島の思いで老を抱いて歸られた宮地さんを見た時、深い感慨にうたれずにはいませんでした。その後「週間勞働」にありし日の「職工生活」の思出が出はじめ、相かわらず素朴で謙虚な宮地さんの姿をそこに見て氏のすなおな個性がよる年波にもつもる勞苦にも些かきずつけられずに保たれていることを私は喜びました。このたびそれが一冊にまとめて公にされると聞き、明治から大正にかけての一青年勞働者のありのまゝの姿を見て、同じ時代に生きた私たちの年頃の者も、今の若い男女も、共に學ぶところが多いことを思わずにはいられません。これをきつかけに宮地さんが再びペンと親しまれる日を期待せずにはいられません。

一九四九年十一月

山川菊榮

わたしは、もともと海軍工廠育ちの職工である。民間鐵工場ではたらいた經驗はごく僅である。佐世保の海軍工廠にはじめて見習工としてはいつたのが十四歳のときで、明治三十年頃だつたと記憶する。日清戰爭直後であつた。

それから呉に行つたが、呉海軍工廠には十七歳から三十歳位まではたらいた。此所ではたらいた期間が何といつてもいちばん長いといえる。日露戰爭中は兵隊にひつぱり出されたが兵隊から戻るとまた呉工廠ではたらいた。

長崎の三菱造船所、神戸の川崎造船所、東京の石川島造船所、その他、ちつぽけな町工場ではたらいたこともあるが、ごく僅の期間で、一時の雨宿りのようなものだつた。官立工場育ちの職工は技術はともかくとして概して能率が低いので畑ちがいの民間工場には不向きだといわれた。はたらきにくいが他流試合のような意味から關西や關東方面の工場をひとわたりうろついて、もまれる方が腕をみがくにはよいとしたものであつた。私もちよいちよい古巣を飛び出したものであつた。がやはり呉がいちばんはたらきよいというわけで結局また舞い戻ることになるのであつたが、明治四十五年の呉工廠ストライキ事件の勃發が私の職工生活の終幕を意味するものとなつた。私は呉工廠第九工場の代表としておさき棒をかついだので四ヵ月間未決檻に放り込まれ明治天皇崩御でやつと保釋になり、共犯

二十五名は大赦になつたが官立工場にはもうはたらくことは相成らねというわけだつた。私自身も、その頃から職工生活にいや氣がさしていたのであつたが、さて他に能のない私のこと、なかなか足を洗おうたつて洗えないものだから東京え迷いこんで、あちらこちらの町工場ではたらいた。海軍工廠ストライキの首謀者というので官憲につきまとわれ、浮沈きわまりない、うるさい年月が續いた。

以上は私の半生の荒筋である。

官立の工場は働きよいと私は前にいつたが今日になつてみると必ずしもそうはいえないことの數々をはつきりと擧げることができる。自分が少年期から官立の工場で馴らされてきたから一應そうもいえるのであつて、合理的に働きよいところであつたなどということは斷じていへない。それは刑務所で長い期間不合理な規則にならされた免囚が社會へ出ると却つて刑務所の方がくらしよかつたと思うような一種の錯覺にとらわれると同じで、少年期から海軍工廠で育つたために、そこがいちばん働きよいところだつたかの如く思つたにすぎない。今にして顧れば、やはりきびしい規則一點張りの一種の刑務所だつたのだ。機械の蔭で煙を殺していつぷく吸うところを守衛に見つけられては日給の幾月分かをひかれたり、仕事のやりそこないをすれば減給されたり、夜業中居眠りしているところを見られては解雇されたり、規則のすべては弱者いぢめにできていた。

今日私が顧みて、馬鹿げていたと思うことは、佐世保の工廠でも呉の工廠でも入職するに、願書を出して呼び出しがあるまで早くて一ケ月、おそいときは二ケ月三ケ月も待たされることだつた。はるばると工廠に入職希望でやつて來て、志願書を出してから下宿屋に一ケ月も二ケ月もごろごろしてよび出しの來るのを待つ身のじれつたさといつたらない。下宿料はたまる。下宿料がたまれば氣がひける三どの食事も身につかぬ。用意して來たふところの金は願書を出すための運動費（組長や伍長に進物をすること）に費消してしまつて御當人は煙草錢もないみぢめさ。もつとも呼び出しが來ても身體檢査で、目がいけないの、右肺が悪いから養生してから出直せとか、身體虛弱だからうまいものをたくさん喰つてからまたやつて來いとか、すげなく軍醫に蹴られて途方にくれる場合さへざらにあるのであつた。二ケ月も下宿屋でくひつめて、やつと志願が思うようにかなつて日給いくらという辭令を貰つたはよいが、下宿屋の借金を拂うのに半年もかかるといつた始末なのである。私はそうした氣の毒なはめに陷つた人間を澤山見て來た。獨りものならまだ始末もよいが、夫婦づれで子供までであつてはうつかり海軍工廠など目ざして來るものではない。という後悔に陷るのである。殊に戸籍謄本や身分證明を要するようになつてからは入職難は一層であつた。

ところが戰爭でも始まつて大量に職工が必要になると關東關西の遠くまで職工狩り集めの手をのばして、身體檢査も身分證明もあつたものではない。渡り者であろうと何であろうと入職者と見れば丁

度いいところえ來てくれたといわぬばかり、迷いこみの入職者に旅費までくれるというわけ。

私も一度、國元の役場から戸籍謄本と身分證明書を取りよせるに三ケ月もかかり、その間の下宿料の滯りを拂つてしまうのにざつと一年かかつたものである。眞夏の暑い時分に二月も三月も旅の空の下宿屋に毎日ごろごろしてくらす憂鬱さといつたら全く自殺の一歩手前どころだ。歸鄕した際、役場へ用があつてその戸籍係の頬骨の尖つた顏を見てコイツだつたのだぞ……と思つたことがある。今でも思い出すと氣持が悪くなるが、四五十年も前の役場なんて萬事にまだまだ封建的遺制の殘色が濃厚であつた。

入職者が身體檢査を受けるのは當然であるとしても、過度な勞働を强いられ通しの職工に完全な健康體があろうわけがないではないか……。職工の身體檢査なんて聞えはよいが裏がえしていえば悪い意味の人爲淘汰だ。その證據に戰爭でも終つて職工過剩ということになると、解雇の理由をつくるために一齊に健康診斷をやる。これは官立工場の常套手段であつた。昔はどんな理由で解雇されても解雇手當など一錢だつて貰えはしなかつた。そうした官立工場に働く職工の唯一の保身術は目上の伍長なり組長に贈物を常に怠らぬことであつた。賄賂をつかうことであつた。海軍工廠ではそれが殊にはげしかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

元來、わたしはあまり丈夫な子ではなく、むりやりに職工になれといわれてなつたわけでもないが、お使いにやられての歸りなど、町の鐵工場を窓の外側からのぞいては多少心が動いたものだつた。そこには旋盤が二三臺いつも廻轉していた。一臺の旋盤をつかつている職工は私が實母の里に預けられていた時分の遊び友達のその子の兄さんで、いつの間にかこの鐵工場で旋盤をつかうようになつていることが私には意外だつた。自分もあんな風に機械をつかうようになろうか知ら……と唯、のぞいて見るたんびにそんな氣が動いたというだけであつた。

「これからの世の中は機械やが何といつてもいちばんいい。」とそんなことをいつている人の言葉をわたしは小耳に止めるようになつた。それがまだ十一か二の時分だ。小學校の成績は三四番から五六番のところで、そう悪い方でもなかつたようであるが、手に職を覚えておるに限る。と誰もがいうような時世であつた。特に好學心があるという程のわたしではなかつたので、尋常科四年生の年の暮れに、城下で洋服仕立屋をしている叔母の家に弟子奉公に住み込むことになつた。というのも、母が繼母で腹ちがいの女の子が二人あつたりしてだんだん家庭が思わしくなくなつたからであつた。平素から私が針箱いじりをする癖があつたので仕立屋の弟子にやつたらよかろう、と繼母がいい出したのである。然し叔母の主人というのが氣むずかしい人で、私はそのため、そこでもいじけてしまい、上達の見込もないと自ら斷念し、家庭へ逃げ戻つたのである。そして遂に職工になる決意で、父のゆる

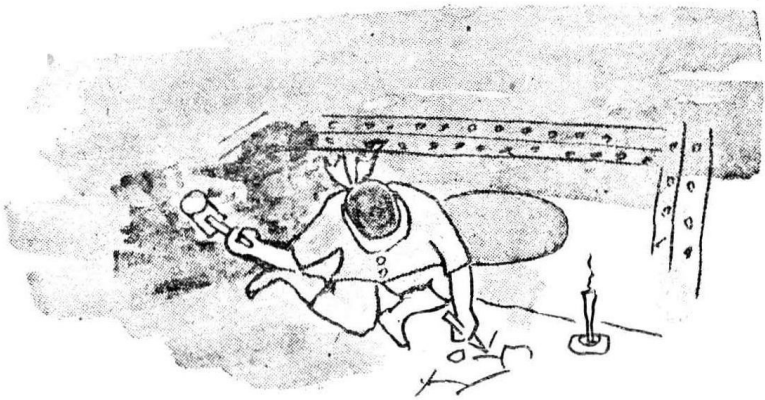
しを請い、佐世保の知りあいの人をたよつて行くことにした。それは十三の秋のことだ。佐世保まで二十里のところを十里は汽車で、そしてさきの十里は徒歩で行つた。

佐世保へついてからいきなり私は少年人夫の中に交つてカンカン虫になつた。カンカン虫といつても通じないかも知らぬが、少年人夫のことで鐵の錆を叩き落す仕事、おもに日清戰爭で分捕つた戰利品の錆おとしである。百噸クレンの圓筒柱が海岸に二本ころがしてあつたがその中にはいこんで内部の錆おとしをやらされたものである。それを二三ヵ月ほど續けている内に、或る人の推薦で、当時の佐世保鎭守府司令長官柴山矢八中將の官邸にボーイで住みこむことになつた。ボーイといつても、長官の子供さんのお守役だ。六歳ばかりの腕白の御令子をするのが役目で、その間に風呂の水を汲みこんだり掃除をしたりした。勉强さえすれば兵学校へ入れて海軍士官にしてやるというようなお言葉であつたが、どうも長官邸の空氣が性にあわぬ氣がしたので二ケ月ほどいておいとまをした。『宮地。おれは若さまというんだぞ。おれのいうことをよくきいて辛抱するか。あん、辛抱するならこのビスケットを一つやるぞ……』と僅か六歳か七歳の子が私を奴隷あつかいにしていうのであつた。で、遂にいやになつた。そしてまたも少年人夫となつて工廠（その頃は佐世保海軍造船廠であつた）の木工場の手傳人夫をした。二十錢の日給だつたが納屋住みだつたので日給の大半は親方にまきあげられた。

「わしの弟子にしてやろう。どうだ。わしの弟子になるなら木工場の見習工に入れてやる。」と木

工場でそういつてくれる人もあつたが、私はその頃、なぜか、大工になる氣はなかつた。然しその時分に大工の弟子になつていた方がどれほどましであつたか知れない。木工場というのはボートや、船室の裝置、その他の構造をするところで、いわば船大工の仕事であつた。第一に機械工や鐵工のように黑くよごれる仕事でないだけでもましだつたのだが、思慮の淺い少年だつた私は大工になりたいという希望は全然なかつた。黑くよごれる職工になりたいのであつた。油だらけになつて機械を使う職工になりたいのであつた。

木工場の手傳人夫の仕事というのは鋸ぎり場へスミツケをした材料を運んだり、カンナ屑をかきあつめて始末したり、晝食のときに湯を汲みわけた藥鑵を組々に配置したり、そうした雜用をすることだつたが、約二ケ月ぐらいもそんなことをやらされてから、今度は製鑵工場附屬の左官部の手傳にまわされることになつた。そこでの仕事は五六人の少年人夫と一緒に、港の沖に碇泊中の軍艦高千穗へ曳船に乘つてゆき、艦底の貯水艙のコンクリートを塗りかえる作業の手傳いをすることであつたが、先ず最初に厚く塗られてある古いコンクリートを鑿でぶつ碎き、ぶつ碎いた破片をバケツで艙外に放り出してさらにあらたにセメントを塗ることであつた。塗ることは大人の左官工がやるのだつたが、古いコンクリートをぶつ碎くのが少年人夫の仕事だつた。艦底の貯水艙といえば大きなビルディングの地下室のようなところだが濕めつぽくところどころに水溜りがあつて陰慘なことに於ては地下室ど



ころではないのであつた。上甲板、中甲板、機關室などから、さらにさらに下降して、せせこましく仕切られてあるところを、小さなマンホールからマンホールへと腹んばいになつてくぐりぬけると、水溜りのあるしめつぽいところ、そこが軍艦のドン底であつた。恐らく空氣も稀薄であろうそのドン底で古いコンクリートをぶつ碎く仕事なのであつた。碎かれたセメントの粉ほこりがもうもうと立ちこめる裡に半日一日と、ぶつ續けにはたらかされるのはやりきれなかつた。今思い出してもぞつとしてたまらない氣持がする。よくあの時は窒息しなかつたと思う。大人の左官工達の人柄もよくはなかつた。甘い、やさしい言葉につられて、この人はよい人だと、うつかり信じたりしようものなら男色のはずかしめを受けるようなこと

になるのであつた。そんな目にあつた少年もいたのである。

軍艦の修理作業に曳船で沖へゆくということは少年の私には愉快に似たものがあつたが、水兵や機關兵などに接するのはいやだつた。

「小僧！　お前に姉さんがおるか……」といきなりそんなことを訊ねるのが彼等の癖だつた。

そうしたいやな思いをしながらも郷里の父のもとへ戻る氣には何故かならなかつた。父のことはいつも氣になつたが父のそばにいた方がよかつた、とは思つたことがない。それほど繼母のいる家庭のいやな空氣にはあきあきして飛び出した私だつたのである。早く正規の見習工になりたい。人夫をやめたい。それのみ心に願つた。

見習工志願の願書を出してから一ケ月ぐらいたつて呼出しが來たときは天にも上る嬉しさを覺えた。本來見習工は採用後三ケ月は無給なのであるが、私は初めから有給にして貰いたさに町工場でこれまではたらいていたということに履歴書を僞つた。試驗はハンマで向う打ちをすることだつた。

「よし、よし、もうよし……」

それこそ、文字通り、三四度、トンチンカンなハンマの打ちざまを見せただけで試驗はすんだのだ。

あまり無造作だつたので、駄目かも知れないと思つたが、有りがたいことには採用されたのであつた。試驗が終つたその日、一人の伍長の帽子を冠つた獅々鼻の男と、人品のよい組長と二人きりいる室に私はよばれていろいろのことを訊ねられた。國もとで親達は何商賣をしているか、とか、兄弟は幾人いるか、とかそんなことを訊ねた後、その獅々鼻の伍長はこういうのであつた。

「おれの弟子にしてやるから、あしたからおれの家に來て工場に通つたがいい。あ、いいか……一人前の鍛治屋になるまでおれのそばにいるんだぞ……」

「はい……」と私は唯簡單に答えた。一人前の職工にしてやるといはれて私は多くを考えなかつた。納屋住みをしたり、知りあいの家に置いて貰つたりしたあげくだつたので、伍長の家へ置いて貰へて見習工として毎日工場に通うことは私として惠まれた一つの運命的好轉のように思えた。で、それまで置いて貰つていた家の主人にそのわけをいつて、私はその翌日、身のまわりの物を持つてその伍長の家に住みこむことにした。伍長夫婦は町裏に二階借りをしていたが私より一つ二つ年下の女の子が一人いた。内儀さんというのは、手荒な呑んだくれの亭主のために苦勞して涙やけのしたしめつぽい顏の長崎女であつた。

私は住みこんだ第一夜から、うつかりこんな家へ來てしまつたことを後悔した。その夜、酒のみ仲間が二三人やつて來て晩くまで飲み續け、夜中に二度も三度もお使いにやられたのにうんざりした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook